



右田教諭による英語授業



ととの
先を見て齊える

和洋九段の英語で未来をつかむ



和洋九段女子中学校高等学校

日本の伝統と西洋の技術がぶつかり合った明治30年。日本で初めて洋載を学校教育に取り入れ、新たな文化との出会いを大切にしてきた和洋九段。その魂を受け継いだ、本質を知る英語教育が次世代を突き進むヒロインを生んだ。

和洋九段女子高等学校
和洋九段女子中学校

驚異の進学実績を裏付けるもの

和洋九段は今年、早慶上智・ICUなど私立トップ大学の合格者が前年度比2.3倍という驚異の結果を打ち出した。とりわけその請負人で、英語力強化に努めた右田重子教諭が担当した特進クラス31名は、三分の二近くがGMARCH以上に進学。受験に強い英語、されど受験で終わらない英語」という信念を掲げ、中1で単語を徹底的に学び、中2からは原書のリーディングを行ってきた。

「わからない単語があってもほとんど読み進めることで、難関大学合格に必須の、長文を怖がらない耐性をつけます。しかしそれ以上に、感受性の豊かな時期に多くの本を読み、たくさんの人生に出会うことで、自分がとても恵まれていることに気づく。今日の私に何ができるのか?、というShining Spiritを心に刻んでほしい」

中2で読むマザーテレサでは、他者の幸せへの貢献が自分の幸せにつながる」というメッセージを伝え、中3では言葉と非暴力で世界を変えたキング牧師を読み、現代にまで続く黒人差別問題を壮大なスケールで感じ取る。また高1希望者対象の2週間オーストラリア留学や中学レシテーションコンテスト・高校スピーチコンテストで、本番に強く、自分の思いを言葉で伝えられる生徒を育成してきた。

愛ある「きびしさ」の先にあるもの

そんな右田スピーットを受け継いだのが、大越弥生さんと小林晴美さんだ。現在、上智大学に通う大越さんは、中1の頃、英語が好きではなかったそうだ。「自分の意思ではなく、やらされている感があったんです。しかしマザーテレサを読んだとき、英語の本質が見えた気がしました。高2レベルの英文なので、すべては理解でき



大越弥生さん



小林晴美さん



右田重子教諭



ませんでした。それでも心に訴えてくるものがあった。そしてキング牧師を読み、日本では感じにくい人種差別の問題を目の当たりにし、日本だけでなく世界とその社会に目を向ける大切さを実感しました。だからこそオーストラリア研修は絶対に参加したいと思っていたのですが、東日本大震災が起こり……。日本において、被災された方々にできることがあるんじゃないか、と迷いました。でも、自分の言葉で震災の実情をオーストラリアの人々に伝えたいと強く思っただけです。能動的になることで語学は伸び、発信してこそ意味があると感じます。将来は自分の言葉で情報を伝えるアウンサーになりたいと考えています」

国際基督教大学（ICU）に通う小林晴美さんは右田先生の授業を振り返り、「本当にきびしかったです」とこぶしを握る。「全然読めない長文をひたすら読まされるんですよ。本当にきびかったです。でも、本から得た心を揺さぶる言葉・メッセージは今も私の指針です。マザーテレサの言葉にお金と違い、愛など目に見えないものは分け合っても減らない。むしろ何倍にもなって返ってくる、というものがあります。英文をきつかけに、今、自分の生きている世界について考えるようになりました。歴史や社会問題を扱った新聞・ドキュメンタリー・映画で自分の世界を広げ、知識をつける。その知識を将来、誰かと分かち合うために勉強するのだと思います。

ICUは学問の垣根を超えて生徒が参加型でコミュニケーションをとります。新しいアイデアに出会えるとても刺激的な環境です。将来の夢は国際的に活動することですが、ICUで自分の足りない部分に気づくと同時に、選択肢がグンと広がりました。この環境に身を置ける今の私をつくったのが和洋九段の英語です」

なりたいたい自分へと橋渡しをするパスポート。大学合格はその一つだろう。しかしそれ以上に、和洋九段の学びで鍛えられたまっすぐな強い意志こそが未来を切り開く原動力となるのだ。